

今野哲也 発表概要

J.ブラームス《アルト・ラプソディー》Op.53の和声構造
——大規模声楽曲に対する「ゆれ」の理論のアプローチ——

今野哲也

声楽作品の和声構造を導出する際、ときにその判断が困難なケースがある。なぜならば声楽曲は、そもそも原詩のフォームを持つがゆえに、しばしば音楽的な「形式」のレッテルに収まり切らない場合があるためである。比較的小規模な歌曲などでは兎も角、大規模な声楽曲となれば、その傾向は尚更と言えよう。そこで本研究は、J.ブラームス (Johannes Brahms 1833-97) の《アルト・ラプソディー》Op.53を大規模声楽曲の一つのモデルとして、その和声構造を「ゆれ」の理論からアプローチすることを目的とする。

この作品の歌詞は、J.W.v.ゲーテの『冬のハルツ紀行』(全11節)から第5～7節が選ばれている。そのため内容的には、「若者の状況」「若者の心」「若者の祈り」という三部構造のドラマが見出される。しかし音楽的な意味においては、各節の反復に伴い、五部構造の様相を呈している。ところで、島岡理論における「ゆれ」の概念は、必ずしも「形式」のレッテルに依存するものではない。あるがままの調進行を客観的に判断し、和声構造のドラマトゥルギーを明確化し得る点が、「楽曲のゆれ」の概念の真骨頂と言えよう。楽曲内部では調が大きく「ゆれ」動きながらも、どの部分でもつねに主調への回帰性が認められるが、こうした姿勢の下に、《アルト・ラプソディー》の和声構造を検証してゆくと、五つの部分の各々においては、ミクロ的な意味での三部構造(アーチ型)が浮き彫りになることが分かる。

こうした視点は、とくに声楽作品には有効と言えようが、「形式」に振り回されない態度が、ときには器楽曲へのアプローチにおいても有効である旨を述べ、発表の結論とする。これまで発表者は、和音それ自体の意味や、局所的な異名同音的転義など、極小次元の「ゆれ」を主たる研究対象としてきたが、本研究においてはむしろ、マクロの視点が主眼となる。そうした新たな観点から、声楽作品にアプローチする本研究には、意義があると考えている。